
指さきから出発する

アヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

指さきから出発する

【著者名】

NZノード

N6485N

【作者名】

アヤ

【あらすじ】

なんでもない日常です

なんと呼ぶのだ？。

「ねーねー、アオイちゃん」
「相川つて呼んで」
「やだ」
「なに？」

帰り支度をはじめるアオイちゃんの傍らに立つてそんな会話をするためには、教科書やらノートやらを、あたしはいつも投げ込むように鞄に詰める。

あたしとアオイちゃんは隣席だけれど、油断していると、彼は誰とも田を合わさうとしないでさっさと帰ってしまう。だからあたしの鞄のなかはいつもぐちゃぐちゃだ。でも、最近はそれが素敵なもののように見えてきた。

「一緒に帰る、アオイちゃん」

アオイちゃんは嫌だと言わない。

田を合わせて話さうとしても、彼はかたくなに視線を逸らして薄い唇を微かに開いてひそかに微笑んでいた。いつも嫌そうだけれど、いやだと

言わないから、あたしは一緒に帰る」と言つ。

アオイちゃんは家が遠いのに自転車通学で、片道一時間もかけて学校に来る。

電車を使えばいいじゃない。

あたしが前に元をつ言つたら、アオイちゃんは少し困った顔をしただけだつた。

電車通学にしてくれたら、電車の中もいつしょなになあ、と思つ。でも彼はそうしないので、学校から駅までの短い距離をいつしょに歩く。一緒に歩きながら、少し背の高いアオイちゃんの横顔を見る。

一重ですうつと細い彼の右眼だ。左田は一重、右よりもすこしおきいから、彼の眼はバランスが悪い。その両田がそろつてあたしを見るととき、あたしは声がしばらく出せなくなる。

「猫だよ、アオイちゃん」

「うん」

「かわいいねえ。アオイちゃんは猫好き?」

「ふつ」

「ふうん」

ふつうつてなあに。

アオイちゃんの考へてていることはちつとも解らないし、あたしの考へていることはちつともアオイちゃんに伝わっていないだろう。いま田の前を横切つて行つた茶トラの猫はかわいかつたね、つて言いあうくらい、許されてもいいんじやかないかしら。なんでこんなにつれないのこの人、ねえ。

誰かがあたしたちを見ていたら、そう言いたい。

あたしが黙つてしまつと、アオイちゃんの押す自転車のどこかが、笑うみたいにからから鳴る。

あたしは骸骨のお化けが笑う音みたいで嫌いだつたけれど、自転

車をいつまでたってもなおれないアオイちゃんは、別に気にしないんだね。

からから。からかひ。

なんだか腹が立つてへる。

のろのろ歩きのアオイちゃんとあたしの横を、同じ制服の女の子が一人で抜かしていった。

桜の花びらが、ひらひら、その子たちを追いかけて飛んでいる。そもそもそと陰気についているだろうあたしたちなんて居ないみたいに、ふわふわどじやれあいながら彼女たちは、もう随分と近かつた改札の向こうに消えていく。電車の発車したらしい音が、彼女たちの笑い声の合間に割り込む。

ああ。改札がもうすぐそこで嫌だ。

「また明日ね、アオイちゃん」

「うん」

でもあたしは笑つて手を振る。

アオイちゃんが乗った自転車はすぐにスピードを出して、すいすいと走っていく。見えなくなつてしまつまで手をふり続ける自分が馬鹿みたいだと思った。

すきあいしていろいとおしい。
うーん。

どれも違う気がして、あたしはまいにちお風呂で悩む。

アオイちゃんには、あたしの思つてることがちつとも伝わらない。しょうがないから、あきらめて言葉にしてみよつかと思うのだけれども、口に出したら全部、まろまろ零れてぐしゃぐしゃ溶けて、

何も残らない気がする。それって台無じ。

あたしは悩む。

アオイちゃんの古い自転車が鳴る音がする。

からからからから。

たとえば彼と同じ名前だつたら良かつたなあ、と思つ。

たとえばあたしも男だつたら良かつたなあ。たとえば彼みたいに、何かに脅えるように電車が嫌いと言えたらよかつたなあ。

たとえばたとえばたとえ。からからからから。

セックスしたいなあ、とあたしは思う。

同じ人間で、おなじ教室に居て、ほとんど毎日いつしょに帰つているのに、お互いになにひとつ伝わらないなんてそんなことがあるはずがない。

好きとか愛してるとかそれじゃかない気がする。

これをみんなは、何と呼んでいるのか。あたしだけ知らないのだろつか。

最近ブラジャーがきつくなつてきたおっぱいのうえにてのひらを乗せて、「あー」声を出してみる。お湯に半分つかつたあたしの唇の隙間から、ぽいぽいこと泡がこぼれて、すぐに消えた。

数学の授業中に、セックスをしよう、とノートの切れ端に書いた。そうしてそれを指でぎざぎざして千切つて、隣の席のアオイちゃんの机に向かつて放り投げた。

猫が寝る前のときみたいな顔をしていた彼は、あたしのたつた8文字の手紙もじきを読むと、しばらく動きを止めた。

へんな顔をしてくれるのをちょっと期待していたのだけれど、アオイちゃんは何事もなかつたみたいにまた黒板に視線を戻した。
授業中、あたしのことば一度も見なかつた。

「ねーねーアオイちゃん」

「相川つて呼んで」

「やだ」

「なに?」

「一緒に帰る」

帰り道に猫を見たら、また、かわいいねって言おうと決めていたのに、今日は見なかつた。ときどき何処からか飛ばされてくる桜の花びらはもう飽きていて、口に出でなくともいいかなあと思つ。アオイちゃんが押す自転車の音が嫌だ。あたしは何か言おうと思つているのだけれども、かさかさした唇の間からは、息しか出ない。駅が近づいてしまう。からからからから。

先に声を出したのはアオイちゃんで、あたしは、え、と間抜けな声を出して横を見た。

「単細胞生物」

「うん?」

「単細胞生物。理科でならつたやつ。ほひ、//カヅキモとか//ドコムシとか」

「うん」

「俺、ああいうのだつたらいいのに、つて思つたよ。今日」

「今日」

「伊藤が、数学の授業中に投げてきた紙切れを読んだとき」

「ああ

セックスをしない、ひとりで淡々と増える、ひとりで増えるからほかのひとはいらなくて、ひとに近付かない、相手を傷つけないし傷つかない、不用意に肌のあたたかさに感動したりしない。

そんなにせつなくて心細い生き物はいやだなあとあたしは思つ。

「アオイちゃん、手を繋いで良い?」

「うん」

良いと言つたのに、彼は手をちつともこからに伸ばさない。

仕方がないから、あたしは手を伸ばして自転車のハンドルに置かれた彼の手の甲に重ねた。擦り傷が少しあって、すこしだけ固い皮膚だった。あたしのてのひらは、ふにゃふにゃしていて頼りない。少しも似ていない手だ。あたしと、アオイちゃんの。

背中がぞくぞくするくらい、違う。そのぞくぞくの正体がよくわからないまま、あたしの視界ではこんな輪郭がゆらゆらとしほじめる。泣きそうだ。どうしてだろう。

アオイちゃん、あたしが呼ぶと、彼はいつを見た。

「あたしの指をきからり出発して」

「指先?」

「そう。それで、爪をとおつて指をまつすぐすとんと落せる。こからでのからり」

「うん」

「てのひらから、まだまだぐんぐん伸びて血管をまたいで腕を通つてそつして貴方の胸のところまでゆくのです」

「胸」

「わかる?」

「わっぱつ、何も」

ああ。

「心つて心臓の位置にあるんじゃかないのかなあ、アオイちゃん」
「ちがうとゆづり」「じゅあ半にある」
「それも違うと思ひ」

なにひとつお互ににわからなこままだ。
あたしの視界はやつぱりゅうりゅうして、色々な輪郭はぼやけてあ
つちこつち溶けあってゆきそう。
くすぐられるよつにそわそわするあたしの身体はずつと笑つて
いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6485z/>

指さきから出発する

2011年12月21日21時48分発行